

日本の自殺対策を母国に伝える韓国人留学生

朴 恵善さん(33)



韓国ソウル市で5月末、自殺対策シンポジウムを開いた。「緊張でメモが読めない。息子を亡くした母親が泣き崩れながらも必死にマイクを握った。偏見が根強く自死遺族

が顔を出すのが困難な韓国で、タブーを破った。

世界保健機関(WHO)の自殺率の統計で8位の日本は06年に自殺対策基本法を制定した。11位の韓国は、芸能人の自殺も社会問題化するが日本よりも対策は遅れている。

05年、姉の恵京さんが出産直後に急逝。33歳。親より早く死んだ姉。胃がんだった。それが友達には明かせなかった。会社を辞め福祉を学ぶため留学した日本で、自死遺族支援に携わる教授と出会う。遺族の話から、日韓では偏見におびえ、家族の自殺を

英語教育の韓国企業に5年勤め、08年に立教大大学院入学、現在研究生。趣味はおいしい物を食べること。

告白できずに苦しんでいる共通点に気付いた。「欧米にはない。日本の対策は韓国でも効果がある」と確信した。

日本の自殺対策NPO・ライフリンク(清水康之代表)に所属。3月、韓国の民間機関・韓国いのちの電話(이하 eLine Korea)に呼びかけ、ライフリンクとのシンポジウムにこぎ着けた。

10月に、韓国で再び遺族が自分の言葉で語れる場を企画している。「日本では遺族が実名で声を上げ、周囲の心を動かし、基本法ができた。韓国でも遺族の手で流れを作ることを後押ししたい」

柔らかな笑顔の奥の凛としたまなざしは、まっすぐに母国の難題を見据えている。

文・山寺香  
写真・久保玲